



「僕らの人生」

国際文化学部 3年
中村拓美

252カ月 1,095週間 7,665日 183,960時間
 11,037,600分 662,256,000秒
 カップラーメン 3,679,200個 呼吸 176,601,600回
 心拍 794,707,200回 朝ドラ 735,804話
 アニメ 367,920話 千と千尋の神隠し 78,840回
 大学生の夏休み 153.3回 大学の授業 122.64限
 高校生活 7回 オリンピック 5.25回
 小学校生活 3.5回 干支 1.75周
 日本人の人生 0.26回
 僕らの人生は、まだ始まったばかりだ。

● 講評 ●

さまざまな尺度でとらえ返してみると、長いようで、まだまだ短いこれまでの歩み。それでもかけがえないその時間をいろいろなかたちでかみしめていることが伝わってきます。東京の朝焼けのうえに広がるその可能性をこれから精一杯伸ばしてください。



「私は可能性」

社会学部 3年
清水夏実

なんとなくだった、私がこの学校を選んだのは。
 なんとなくだった、私がこの学部に入ったのは。
 なんとなくだった、私がこの席に座ったのは。

私は可能性——。

それと出会ったのは3年生の春。黒い煙をいっぱい吸い込んだような曇天の屋下がりのことだった。私の大学生活は半分以上が過ぎ、ああこのままなんとなく与えられる課題をこなして、なんとなく就職して行くのかななんてぼんやりと考えていた。

たまたま空いていた時間にとった授業。友達が取っているからという定番の理由で選んだのだ。それは文章を書く授業だった。

自分で書いたオリジナルの文章について教員からアドバイスをもらい、1度持ち帰り推敲し、その教室のメンバーで互いの作品を読み合う。

私は書くのが苦手だった。考えていることを上手く言葉にするのが苦手で、エビフライについて書いているつもりがいつの間にか相手にはナスの漬物の話として伝わってしまう。

憂鬱だなあ。そう思いながらいつものようになんとか右端に座っていた。そんな時、ついにその瞬間が訪れた。

学校に行くのが楽しくなった。こんな気持ちは何年ぶりだろう。小学生の時に好きな男の子と席が隣になった時だったか、それとも——。大学生になってこんな気持ちになるとは思わなかった。こんな世界がこの大学にもあったのか。目の前が文字通り、色付いていく。

うまく書かなくてもいい。自分が好きな文章を好きな表現で書く。それが許された場だった。各々の個性が文章に表れていて、教室で学ぶみんなの事を、作品を通して知っていくような感覚に包まれた。

私は3年目にして、やっと大学の楽しさを知ったのだ。新たな知識に触れる、感覚に触れる、価値観に触れる。いつか高校の進路指導の先生が言っていた、大学で学ぶことの楽しさに。

皆と同じことをしなくてもいい。自分の可能性、未来への可能性を感じた瞬間だった。まだ出会っていなかっただけで、誰もが可能性を秘めている。私の中の可能性はこの瞬間、ひょっこり顔をだした。

さっきまで曇っていた空は、今はもうすっかり晴れていた。綺麗な夕焼けが明日は晴れだと伝えてくれる。今日も教室に向かう足取りは軽い。

● 講評 ●

灰色のような日々が、たまたま取った、しかもはじめは苦手に感じていた授業で、ある瞬間を機に鮮やかに転換したさまがいきいきと描かれています。「私は可能性」という題、そして明日は晴れだという確信がワクワクする未来を切り拓いていけるようになったことを物語っていますね。



「彼女と私のこれから」

経営学部 4年
金子由佳

「久しぶり〜!」

と、元気に声をかけてくる彼女。
 夏休み明けの彼女、もとい私の親友は、いつも地元土産をぶら下げてやってくる。

この見慣れた光景に、私は嬉しさと寂しさが込み上げてきた。大学1年生の頃から共に学生生活を送ってきた親友は、地元で就職する。春からは今みたいに会えることが“当たり前”ではなくなってしまうのだ。あと半年ほどの彼女との学生生活。噛みしめながら過ごそうと心に決めている。

そして今、彼女と私は、卒業論文を共に制作している。

今まで一緒に講義を受けることはあったが、一緒に何かを創り上げるというのは初めてだった。趣味嗜好が似ている彼女との話し合いはとても楽しく充実していた。

しかし、教授から何度も何度もダメ出しされる度に私はがっかりしていた。卒業論文は卒業までに完成するのか?とネガティブなことを考えるほどに。

そんな私とは対照的に、彼女はいつもニコニコしながら楽しそうに制作に取り組んでいた。

ある日、「卒業論文って、思っていたより大変だね」と、何気なく声をかけてみた。
 すると彼女は、「大変」だね。けど、あなたと一緒にやるから、「出来ちゃう」ね」と笑顔で答えた。

彼女はいつも“当たり前”が“当たり前”ではないことに気づかせてくれる。
 苦楽を共にする・してくれる相手がいることは、とても恵まれているということ。
 そのことに気づいてからは、調べ物をするのもレポートを書き進めるのも、何だかとても楽しかった。

16年間。振り返れば、小学校・中学校・高校・大学と、長い学生生活であった。
 「学校は、勉強だけを学ぶ場所ではない。コミュニケーションを学ぶ場でもある。」
 なんて、よく聞く言葉かもしれないが、私は最後の最後でその真意に気づくことができた。

担任の先生や教授だけではない。

彼女や今まで出会った人達は、みんな私の“師”である。
 そして私も誰かの“師”であり続けることが、これからの目標だ。

● 講評 ●

大学で出会った親友との楽しい日常も、卒業が訪れることで当たり前のことではなくなってしまうという切ない気持ちがヒシヒシと伝わってきます。師として仰げる素晴らしい人たちの出会を提供できるよう、我々教員も努力していかなければと思いました。

